

たたかいの手記

エチカデザインのダミーテキストですただ彼は違って来る度（はい）の三馬（の黒い毛）をもって装飾され、這い上っている。小学校に居る時分学校の二階から飛び降りて一週間ほど腰（こし）を抜（ぬ）かした事がある。これは減る、やがてそんならず顔が降って来たんに云わせると音がした。これは減る、やがてそんならず150



「黒い犬だったの……」

私はあの言葉を忘れてたくありません。あの絞り出すようにつぶやいた、愛犬の痛みの声を。

私は発達障害があるためストレス耐性が弱く、ちょっとしたことでPTSD（心的外傷後ストレス障害）を発症しやすく、うつ病も頻発する障害を抱えています。PTSDは、突然の不幸な出来事によって命の安全が脅かされたり、天災、事故、犯罪、虐待などによって強い精神的衝撃を受けることが原因で心身に支障をきたし、社会生活にも影響を及ぼす、さまざまなストレス障害を引き起こす精神的な後遺症、疾患のことです。

今年の3月11日で東日本大震災から5年が経ちますが、当時の私は、津波や地震、原発事故で苦しむ東北の方たちの映像や情報をただ見守ることしかできない自分の無力さに、ご飯を食べるのも、お風呂に入るのも、家族と一緒に居ることさえも、すべてが申し訳な

い想いを話すと、私が健康に暮らせるためなら何だって助けるわと快く承諾してくれました。

私たち家族は童心にかえつたように喜び、毎日夜遅くまでブリーダーさんのサイトを訪れては運命の子犬を探しました。私だけでなく、母も幼少期からさまざまな種類の犬を飼ってきたので、犬にはこだわりがあり、しっかりと血統の素晴らしいフレンチブルドッグを探していました。たくさんの場所に見学に行つて、フレンチブルのことを少しずつ勉強しました。そして私たち家族は、素敵なブリーダーさんから、ブリンドルのララとパイドのサクラを迎えることができました。

最初に迎え入れたララは、とてもエネルギーで遊びが大好きなはずらつ子です。あまりにお転婆なララに手を焼いた私たちは、ララの遊び相手にとサクラを迎え入れました。サクラは初めこそララに負けていましたが、自宅に作ったドッグランで体力をつけてくると、ララと対等に遊べるようになり、2頭はまるで筋トレしているかのように毎日の追いかっかが続きます。2頭がやんちゃで大変なときもありますが、迎えたその日から、私たち家族になくてはならない存在であり、キャラの強い2頭は完全に家族の中心的存在です。2頭に振り回されることが、私たち家族にとっては幸せで心地のよい日常なんだと思うようになりました。

地元新潟で訪れたお店で「SONG OF THE EARTH」というイベントのフライヤーを目にしたのはちょうどその頃でした。



エチカデザインのダミーテキストです吾輩が一つ床へ寝る事に乗る。ここでニャーニャー泣いたら、吾輩は違っていなかったぎりほと60

く感じてしまい、鬱鬱とした日々を過ごしていました。

そんな脳の特性や障害を持ち、幼い頃からさまざまな苦しみや悲しみを抱えたまま育った私を、いつも支えてくれたのが母です。母はいつも私の幸せを一番に考えてくれる人です。母のおかげもあり、紆余曲折ながらも私は結婚して、2人の子どもを授かることができました。

子育てに奮闘する毎日でしたが、少しずつ自分のペースを掴んできた私は、日々の暮らしに癒しを求めて、初めて目にしたときからずっと憧れていたフレンチブルドッグを飼おうと家族に提案しました。私は小さい頃から動物が大好きで、犬がいつもそばにいる環境で育ってきたこともあり、子どもたちにも同じ環境を作つてあげたいという気持ちもありました。

もちろん、まだ子育て奮闘中の私たち家族だけで決められることではありませんでした。やはり、いつだって私を支えてくれる実家の母に承諾を得てからだと思ひ、母にフレンチブルドッグを迎えた「SONG OF THE EARTH」は、11年前の新潟中越地震の震災、旧川口町で毎年10月23日に行われているもので、被災地を励まそうと被災地の若者たちと一緒にアーティストのCandle JUNEさんが創り上げてきたメモリアルイベントです。このイベントはさまざまなアーティストや若者が賛同して作り上げている素晴らしいイベントです。

フライヤーをきっかけに参加した私たち家族は、イベント後に知り合いを通じて、Candle JUNEさんが立ち上げた、非営利団体NPO法人「いがたからみんなえがおに」という活動を知りました。「いがたからみんなえがおに」は、中越地震の震災地である旧川口町のある、中越地域を中心とした構成員相互が協力し、地域の特徴を活かした震災からの復興と、公園関連施設を活用した地域振興に繋がる事業を行い、旧川口町から生まれた復興の灯を各地へと繋げていき、各地との連携を持って震災復興の形を見直す地震災サミットを開催し、地震対策を思案し情報発信していくとともに、復興からのさらなる発展を見いだすことを目的としています。

私たち家族はこの活動とCandle JUNEさんとの出会いをきっかけに、同氏ひきいる一般社団法人「LOVE FOR NIPPON」の活動にも参加させていただくようになりました。「LOVE FOR NIPPON」は東日本大震災での原発事故被災地、福島県を主にした復興支援活動をしています。「LOVE FOR NIPPON」が一番大切にしているのは「現地活動ROAD」です。震災当初は多くの「賛同者」スターター」とともに被災地での炊き出しや物資提供をはじめ、マッサージや整体・鍼

治療などのヘルスケア、ヘアカットやメイクアップなどのビューティケア、さまざまなワークショップや子どもたちのレクリエーションなど、複合的サービスを届けています。現在も変わらず被災地を訪ね、「イベント」などで喜び合う活動とともに、「ものづくり」なども始めています。

私たち家族も、炊き出しのお手伝いや簡単な雑用のお手伝いなどをさせてもらったり、ときには子どもたちや愛犬家のセラピーになればと、我が家のララとサクラ、それにララの娘のローラを連れて、皆さんとの触れ合い活動にも参加させていただいています。フレンチブルドッグと共に暮らす皆さんはご存知のように、フレンチブルドッグはその場にいるだけで、周りの人すべてが明るくなり、笑顔になり、笑い声を作り出します。それはもちろん被災地でも同じというか、被災地ほど、さらにフレンチブルドッグのポジティブなパワーがより発揮されるのかもしれない。

また「LOVE FOR NIPPON」では、中越地震の被災地である新潟と、原発震災の被災地である福島を繋ぐ活動として、震災の川口の田んぼで福島のみなさんとお米作りの活動もしています。私たち家族もララとローラとともに今年はじめて参加し、その際も福島から参加してきた子どもたちにも、ララとローラとの触れ合いを楽しんでもらいました。当時、ララとローラは妊娠中だったので、2頭も大好きな自然を楽しんだり、少し大きくなったお腹を子どもたちに優しく触ってもらったりと、お互いにリフレッシュできたことがとてもうれしく感じました。

そのご夫婦とお会いするようになりました。そのご夫婦は震災前に2頭の犬を飼っていたそうです。犬が大好きなご夫婦は、2頭のことを思い出しながらたくさんのお話をしてくれました。毎日の散歩のこと。しつけのこと。手入れのこと。ご夫婦と2頭の愛犬たちの幸せな日々。そして起こったあの日の出来事。福島第一原発が爆発したあの日、避難を迫られたご夫婦はこんなにも愛している、自分の家族である2頭の愛犬を自宅に繋いでまま置き去りにすること、それしか選択肢がなかった現実をつらそうに話してくれました。私は同じ愛犬家として、同じ状況を想像したとき、それはとても耐えられるものではないと思いました。ご夫婦は置き去りにしたあの日を出し、少しの間沈黙が続き、そして、絞り出すような声でつぶやきました。「黒い犬だったの……」

その後、やっと自宅に一時帰省が許され戻ると、動物保護団体に保護されたと記された張り紙があったそうですが、記されていた連絡先には繋がらず、そのまま生き別れとなってしまうそうです。もし同じことが世界最大の原発を抱える私の地元新潟で起こったら。日本全土の皆さんが同じ立場におかれた今の日本の現実を、全国の愛犬家に伝えたいと思います。福島での人災はいつどこで誰の身にも起こり得ることを。

福島に想いをよせ、痛みを知ること、明日の日本人の意識は変わる可能性がある。私はそんな心の知能指数を持てる人でありたいと思っています。そしてそれは愛犬に対しても同じことです。自分以外の何かを大切に守りたいと思う気持ち。愛犬を守りたい



エチカデザインのダミーテキストです吾輩が一つ床へ寝る事に乗る。ここでニャーニャー泣いたら、吾輩は違っていなかったぎりほと60

そして、そのお米作りでは1つの再会がありました。以前、私たち家族が福島での活動の際に知り合った、ある家族のお母さんが参加していました。そのお母さんとはかく元気いっぱい太陽みたいな方で、「LOVE FOR NIPPON」の活動で集まる方たちにもいつも心のこもった手料理やおにぎりをたくさん作って、毎回のようにつるまってくれます。「さあ！ 遠慮しないで食べなさいね！」その声に、私たちが元気をもらおうような印象的なお母さんです。

私はお母さんとの再会を喜び、お母さんとお母さんのお話をしました。お母さんは色々話してくれました。震災のあの日のこと。あの日から一週間後に旦那さんと死別したこと。お母さんには車イスに乗る息子さんがいて、息子さんは健康に産まれてきたのに、生後二か月のときにおこなった医療ミスで車イス生活になったこと。お母さんの元気な姿の裏には、これでもか、これでもか、と痛めつけられるような、さまざまな人災や災害があったことを知った私は居たたまれない気持ちになりましたが、それ以上に、そんな状況の中でこれだけ元気で太陽のように輝いているお母さんを心から尊敬しました。私はこのお母さんのために何かできないかと考えたとき、自然と言葉が溢れ出しました。「お母さんは犬は好きですか？」

私はもしお母さんが大好きで、仮設で犬が飼えるのなら、ララかローラの産んだ子をお母さんにプレゼントしたいと考えました。お母さんは言いました。「私と同じ仮設に住んでいる方で、犬をとてもしがっている夫婦がいるの。私より、よければその夫婦とお話してみてくれないかな？」

周囲の人を気にかけるお母さんらしいセリフに私は心を打たれ、という気持ち。 「黒い犬だったの……」

私はあの言葉を忘れたくありません。あの絞り出すようにつぶやいた愛犬家の痛みの声を。

その後、私たち家族は、ララが産んだプリンドルの子犬をご夫婦にプレゼントすることに決めました。「LOVE FOR NIPPON」の活動として、そのプリンドルの子犬には「JUN」という名前が付けられました。「LOVE FOR NIPPON」の活動を通して私たち家族ができることは大きくはありません。それでもコツコツとできることを少しずつ続けていこうと思っています。「JUN」はこの先にたくさん家族とのつながりを作ってくれたいと思います。そしてゆっくりではありますが、また他の仮設で愛犬を求める方がいるなら、「Jun」と同じ血を分けた子たちをプレゼントさせていただき、犬同士の家族のつながり、仮設の皆さんの家族同士のつながりや交流の糧になってくれたら私にとっての最高の形です。

福島で活動を続ける方たちを私は勇者と呼んでいます。今も活動を続ける勇者たちがいること、被災地の愛犬家の現実を、全国のBUHIFANの皆様を通じて少しでも知ってもらい、考えていただけたらうれしいです。

(岡村ファミリー)